

令和5（2023）年度前期
授業評価アンケートの結果と分析及び提言
—PDCA サイクルに向けて—

教養教育院総務委員会委員長
岩田 貴

目的

大学教育に関しては、教育目的・目標の明確化やその到達度、さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために、学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。また、学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、双方向の PDCA サイクルを確立し、徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

令和元年度から毎回すべての授業科目群を対象として期末に実施している。本年度も同様に実施することとした。令和5年度から新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが季節性インフルエンザと同じ5類に移行し、全国的に制限のない日常が取り戻されることとなった。教養教育では、第1週目の授業は（可能な限り第2週目の授業も）遠隔授業を推奨しながらも、それ以後も感染防止対策を徹底しながら原則対面授業の実施とした。

今回のアンケートは令和5年7月10日～8月10日に実施した。教員に対しては、授業実施報告書の提出（令和5年9月末まで）として実施した。昨年度と同様に、通常の項目に加えて遠隔授業で良かった点と不都合の有無を尋ねる項目を自由記述式で追加した。

結果と分析

1) 回収率

令和3年度から従来の8科目群が再編成され、4科目群となった。前期の期末アンケート回収率の平均値（令和4年度平均）は、教養科目群 53.0% (57.93%)、創成科学科目群 49.55% (52.84%)、基礎科目群 47.9% (47.45%)、外国語科目群 57.14% (63.93%)であった。令和4年度前期と比較して、基礎科目群以外は回収率が低下しており、コロナ禍以前よりも回収率が低い状況が続いている。科目群の違いよりも個々の授業による違いが大きいことは例年と同様であった。回収率低下は3年間のオンライン授業明けによる対面授業後のアンケートの説明不足が原因の一つと考えられ、学生と各教員に周知徹底を依頼しているが、改善は見られていない。アンケート結果の授業題目へのフィードバック効果の重要性や意義を教員、学生共に再認識してもらうよう啓発し、さらなる対策が必要であるとともに、特に学生諸君は自分の意見を授業に反映させ充実した授業にできる数少ない機会であることを考えていただきたい。

2) 受講環境について

今度から原則対面授業の方針であるが、対面授業に対するメリットも、デメリットもほとんど意見がなかった。今期も遠隔（オンライン、オンデマンド）授業を行う授業題目もあったので、今年度も受講環境に関する調査の一つとして、今回も遠隔授業で良かった点と不都合があった点を調査した。時間割の都合で遠隔授業を学内で受講する場合も多いことから、多様な受講環境を反映した意見が見られた。

遠隔授業でよかった点についてのコメントは、大学までの通学時間を節約できること、リアルタイムの授業ではなくオンデマンド授業の場合、特に語学の授業で意見が多かったのが、繰り返しできることで発音の確認（口の動きなどの観察）が可能となったことが挙げられた。教員としては、提供する授業の理解度を学生から図ることがオンライン授業では困難などの意見があるが、学生にとっては反復学習することができ、メリットとしてとらえているようであった。一方、同じ語学でもワークショップやペアワークで実際に友人とコミュニケーションが取れた、グループディスカッションが対面のほうが行いやすかった、など対面授業の良さを再認識した意見も多かった。また、自分のPC等で資料を閲覧できること、教員の声が聞き取りやすいこと、オンデマンドでは講義を繰り返し視聴できることなど、授業の理解促進に関する意見が多かった。コロナ禍における遠隔授業の教員のスキルや学生の対応力の向上により、遠隔授業の利点を積極的に活かして学修に役立てる体制が整っていることがわかる。遠隔授業を効果的に活用した具体例としては、教員が様々な質問をしてその結果をリアルタイムでグラフ化して情報共有したり、チャット機能を用いてその場で質問させたりすることで、ほかの学生が分からないところも知ることができる、などがあった。対面授業であっても、授業の様子を撮影して後日配信するなど、オンデマンド授業との組み合わせなどの工夫が今後は出現することが期待できる。

遠隔授業による受講環境の不都合な点としては、インターネット回線の不具合に起因するトラブルの報告が昨年度と同様に非常に多かった。パソコンの操作に慣れていない、機器の不具合に対応できないというコメントはBYODが浸透したためか減少傾向にあったが、一定数存在した。回線や機器の操作に関するトラブルは学生ばかりでなく教員にも発生することがある。教員の多くは一昨年度から遠隔授業の実施経験を重ねているが、このように学生と教員の双方にそれぞれトラブルのリスクがあることを考えると、すべての授業を常に最善の状態ですべて遠隔授業として実施することは困難である。音声や映像が途切れると理解の妨げになるのは当然であるが、内容の理解以前の問題として、資料などのアップロードが遅れたり、レポートの提出期限に関する重要な通知を聞き漏らしたり、課題の解答の送付先が統一されていない、などで混乱して、提出物の提出が遅れるなどにより成績評価に影響することへの不安も大きいようである。また、学生同士あるいは学生と教員とのコミュニケーションに関しては、遠隔授業で、視聴することで出席となるルールにした場合、出席とカウントされているか不安などの意見もあった。授業中でグループディスカッションや、チャット機能を駆使したため、同じ授業を受講している学生の様子がわからないなど、孤独感を示す意見は、昨年度よりかなり減少した。また、対面授業よりも遠隔授業の方が良いという意見が増加しており、今後の授業設計においてオンデマンド授業などの取り入れや、組み合わせなどで活用することを検討する必要がある。今年度は原則対面授業としているため、遠隔授業が混在する時間割による、学生の移動時間の問題や、学内で遠隔授業を受講する場合の教室や語学のための個室不足などに対する指摘は少なかったが、対策を検討しておく必要がある。学内の Wi-Fi 環境は順次改善が進められているが、接続不良は今期も少なからず存在しているため、さらに設備の充実を進める必要がある。

3) 教員の授業に対する取り組みについて

自由記述のコメントに基づいて特徴的な授業方法等を例示する。良かったという意見が多かった遠

隔授業の例として、教養科目群で「歴史上に起こった出来事を資料に基づいて新たな視点から考えることで、物事を多角的に考えることができるようになった点が良かった」、「歴史学や人文学全般に通ずる考え方について学ぶことができたのがよかった」、など授業内容の工夫や、「授業の始めに復習をやってきていたもので、自分でカバーしきれていない単元のカバーがしやすかった」、「体験型授業で楽しかった」、遠隔授業でも「ZOOMのチャットなどを使って学生の意見を聞いたり、反応を見たりしているのが良いと思います。私も他の人の意見を聞くのが楽しかった」、など授業の進め方の工夫に対して好評価の意見があった。さらに、遠隔授業で不満があったIT関連のトラブルについては、「パソコンの不具合に対して、先生が何らかの対応をとってくださり非常にありがたかったです」、と教員側の努力に対する評価も見られた。対面授業であっても、その授業を撮影し、後日動画コンテンツとして異時配信して、復習を促す授業がある。オンデマンドコンテンツを通して自分のペースで授業の復習が可能で、ライブ授業での漠然とした疑問をオンデマンドコンテンツで解決ができたり、改めて疑問点をより明確にして後日質問しやすいということで、学生の満足度が高く、両方式の利点を活用した例といえる。また、授業の進め方の工夫として、「学生からのコメントを授業冒頭で取り上げてそこから様々な話題に移っていくという授業内容だったのだが、これによって自分では気づかなかった視点を得ることができたり、新しい疑問の発見につながることができたりした。授業内容も大変分かりやすかった」、などの意見も見られた。一方で、「一方的な授業だったので遠隔で行えたのではないと思う。」、「各講義の授業内容が重複しており、意義を感じなかった。授業で個人が出したレポートについてのみを述べる講義は必要ないと思った。」、「先生によっては言葉が早口で聞き取りづらい場合があり、話す内容も同じことばかりだった。」など久しぶりの本格的な対面授業になったため、教員の対面授業のスキルを改めて見直す必要があると感じられた。今後は、オンデマンドを含めた遠隔授業と対面授業のそれぞれの利点を活用することが期待される。遠隔授業と対面授業の両方の利点を活かした例として、対面授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリッド形式も一部の授業で実施されている。この場合は「前回の授業内容や課題の質問があるときは次の授業で大学に来て、対面で受けて、直接質問ができた。」というコメントに見られるように、このような工夫は対面授業とオンライン授業がモザイク状になった時間割の問題を解決する一助になる可能性が伺われる。また原則対面授業なので、遠隔授業の配分を工夫すれば、対面で授業を行う負担も顕現される可能性があるのではないだろうか。外国語の授業では、対面授業に戻ったことで、座席の位置によっては教員の発音の口の動きなどが見えないなどの不都合が生じ、遠隔授業特にオンデマンド授業を望む意見もあった。今後は対面授業を基本として、クローズアップや反復練習してほしい部分はオンデマンドでmanabaなどにアップするなど何らかの工夫を検討することが望ましいと考えられる。

4) 学生の授業に対する意識

感染対策が求められる状況が長く続き、学生にとっては遠隔授業が通常の授業形態であるかのように受け入れられてきており、新型コロナ感染症の取り扱いが5類に移行し、従来の対面授業も可能となった今年度の前期では教員、学生共に久しぶりの対面授業に戸惑いを見せた部分もあった。これは教員の多くが遠隔授業に慣れ、遠隔授業の利点を活用した授業が増加したことから、学生の意識も遠隔授業を肯定的に捉える傾向が強まっているからである。ライブ形式の遠隔授業では対面授業と同等と評価する意見が多く、通学時間やモニター越しの拡大視効果などのメリットを付加価値として挙げる意見も多かった。オンデマンド形式の授業については、時間割に縛られないことや繰り返し視聴できるという利点は認識されているが、一方的な受け身になりがちであることから、対面授業やライブ形式の遠隔授業の併用もしてほしいという意見もある。また、ライブ形式の遠隔授業では毎回出席確認の小テストなどを課す授業が多く、この方法に対するコメントからも学生の授業に対する意識を読み取ることができる。リアルタイムで出席確認ができるという教員側のメリットに加え、学生側は毎回の

オンライン授業を受けるモチベーションになるという意見や、「小テストによってより深く考えるきっかけになった」という感想もあり、遠隔授業の課題をきっかけとして大学での学びの意義を見出していることが窺える。一方的になりがちな講義において学生のモチベーションを向上させるための参考になる意見である。

総括

本年度前期は基本的な感染対策講じつつ、原則対面授業を実施することとなった。久しぶりの本格的な対面授業で対面授業の良さや重要性が学生・教員の双方で改めて認識されたとともに、遠隔授業のメリットも強調された結果であった。遠隔授業のメリットを活かして対面授業と組み合わせることを検討する必要がある。今後も引き続きこのようなアンケート等を活用して、改善のサイクルを進めていくことが重要である。

提言

アフターコロナに向けた授業実施方法の再検討が引き続き望まれる。昨年度後期のアンケート分析において提言をまとめたが、本年度も大きな変化は見られず、引き続き検討が必要であるため再掲する。

1. 大人数の講義では遠隔授業の利点が多く示されており、アフターコロナでも継続することが妥当と考えられる。ただし、コミュニケーション不足等の問題点もあるため、クラス規模で一律に決めるのではなく、授業の目的や内容に応じて部分的に取り入れるなど、柔軟に考える必要がある。
2. オンラインコンテンツの充実により、反転授業を容易に実施できるようになった。アフターコロナにおいて対面授業主体に戻った現在、コンテンツを活用した多様な授業設計が望まれる。
3. 学生は教員が独自に工夫した実施方法をしっかりと評価し、改善してほしい点も評価方法だけでなく授業方法にまで踏み込んでアンケートに記載しているので、教員は真摯に学生からの評価を各授業に反映させてほしい。
4. 教養教育院としても評価の高かった授業題目の工夫されている点や、評価が低かった点について教員間で情報交換を行い、継続的にフィードバックするFDなどの場を設けたい。
5. 遠隔授業を実施する場合には、ポータル (学生からの入口) を明確にする必要がある。各授業への入口が異なると学生が混乱する恐れがあるため、可能な限り同一のポータルを利用できるように統一することが望ましい。
6. 学内で遠隔授業を受講するためのスペースやWi-Fiの充実などの物理的環境を整えるとともに、周囲を気にせずに発語が可能なスペースを設置することが望ましい。
7. 対面授業とライブ形式の遠隔授業が混在する時間割の問題点が多数指摘されているため、対策が必要である。学内で遠隔授業を受講するためのスペースや Wi-Fi の充実などの物理的環境を整えるとともに、例えば曜日によって対面または遠隔 (ライブ形式) の日を設定するなど、時間割そのものを見直すことも含めて考えるべきであると思われる。